

2020. 5. 10 (日) マタイ20:1~16

20:1 天の御国は、自分のぶどう園で働く者を雇うために朝早く出かけた、家の主人のようなものです。

20:2 彼は労働者たちと一日一デナリの約束をすると、彼らをぶどう園に送った。

20:3 彼はまた、九時ごろ出て行き、別の人たちが市場で何もしないで立っているのを見た。

20:4 そこで、その人たちに言った。『あなたがたもぶどう園に行きなさい。相当の賃金を払うから。』

20:5 彼らは出かけて行った。主人はまた十二時ごろと三時ごろにも出て行って同じようにした。

20:6 また、五時ごろ出て行き、別の人たちが立っているのを見つけた。そこで、彼らに言った。『なぜ一日中何もしないでここに立っているのですか。』

20:7 彼らは言った。『だれも雇ってくれないからです。』主人は言った。『あなたがたもぶどう園に行きなさい。』

20:8 夕方になったので、ぶどう園の主人は監督に言った。『労働者たちを呼んで、最後に来た者たちから始めて、最初に来た者たちにまで賃金を払ってやりなさい。』

20:9 そこで、五時ごろに雇われた者たちが来て、それぞれ一デナリずつ受け取った。

20:10 最初の者たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思ったが、彼らが受け取ったのも一デナリずつであった。

20:11 彼らはそれを受け取ると、主人に不満をもらした。

20:12 『最後に来たこの者たちが働いたのは、一時間だけです。それなのにあなたは、一日の労苦と焼けるような暑さを辛抱した私たちと、同じように扱いました。』

20:13 しかし、主人はその一人に答えた。『友よ、私はあなたに不当なことはしていません。あなたは私と、一デナリで同意したではありませんか。』

20:14 あなたの分を取って帰りなさい。私はこの最後の人にも、あなたと同じだけ与えたいのです。

20:15 自分のもので自分のしたいことをしてはいけませんか。それとも、私が気前がいいので、あなたはねたんでいるのですか。』

20:16 このように、後の者が先になり、先の者が後になります。』

<説教>

「ご覧ください。私たちはすべてを捨てて、あなたに従って来ました。それで、私たちは何をいただけるのでしょうか。」とペテロは弟子たちを代表してイエスに尋ねました。

それに対してイエスは、ご自分が栄光の座に着くときに、イエスに従って来たペテロたちもイスラエルの十二部族を治めることになることと約束されました。

また、この地上でイエスのために捨てたものについてはそれとは比べものにならない豊かでも多くの報いをも約束され、更に改めて永遠のいのちを受けることを約束してくださいました。

そのようにして、ペテロを初めイエスに従って来た、またこれからも従って行くほかな

い弟子たちをイエスはあわれみ深く、恵み深く慰め励ましてくださいました。

と同時に、そんな弟子たちの心のうちにある誤った思いをイエスはお見逃しにはなりませんでした。

その思いとは、あの金持ちの青年を「小さい者」「資格無き者」「後の者」と見下し、一方で自分を「大きな者」「資格のある者」「偉い者」「先の者」と見上げる誇り、過信、高慢でした。

そこで、イエスは「しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になります。」(19:30)と言って、「先の者」を自認していたペテロほか弟子たちに注意をなさいました。

人間の目や思いにおいて大きい者が神の目や思いにおいても大きいとは限らないし、人間の目や思いにおいて小さい者が神の目や思いにおいても小さいとは限らない。

神の御意思(みこころ)、御支配、みわざが往々にしていかに人間の判断や思いとは違い、人間には予想もしないものであるか。

「(なぜなら)天の御国は、自分のぶどう園で働く者を雇うために朝早く出かけた、家の主人のようなものです(から)。(20:1)とイエスはたとえでお教えになりました。

「主人」とは「天の」父なる神のことです。

「自分のぶどう園」とは狭い意味では教会のこと、広い意味では世界のことでしょう。

「働く者」「労働者たち」とは神のための働き人、弟子たち、クリスチャンということでしょう。

主人が最初の「労働者たちと一日一デナリの約束をして」彼らを「ぶどう園に送った」(2)のは「朝早く」(1)ー6時ごろーでした。

もしかしたら収穫時期で一人でも多くの労働者が必要だったのかもしれませんが。

主人はその後「九時ごろ」「十二時ごろ」「三時ごろ」「五時ごろ」それぞれ出て行って労働者たちを雇ってぶどう園に行かせました(3-7)。

「夕方になった」(8)、つまり朝の六時ごろから夕方の六時ごろまでの一日12時間の労働時間が過ぎ、ぶどう園の主人が労働者たちに賃金を払う時となりました。

そのときに“問題”が起きました。

20:9 そこで、五時ごろに雇われた者たちが来て、それぞれ一デナリずつ受け取った。

20:10 最初の者たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思ったが、彼らが受け取ったのも一デナリずつであった。

20:11 彼らはそれを受け取ると、主人に不満をもらした。

20:12 『最後に来たこの者たちが働いたのは、一時間だけです。それなのにあなたは、一日の労苦と焼けるような暑さを辛抱した私たちと、同じように扱いました。』

問題の発生源は「最初の者たち」でした。

彼らは「一時間だけ」しか働かなかった「最後に来たこの者たち」と、「一日の労苦と焼けるような暑さを辛抱し」て働いた自分たちを比べました。

“あんな人たち”よりも桁違いに多くの労働時間(まるまる一日、目一杯の12時間)と肉体的精神的労力を費やして働いた自分たちは「もっと多くもらえるだろうと思った」

のでした。

“あんな人たち”よりずっと長い時間、真面目で忠実に働いた自分たちに「主人」が「もっと多く」の賃金を払うのは当然だと考えました。

しかし実際は彼らが当然のこととして考えたようにはなりませんでした。

それで彼らは、ひどい、不公平だ、不当だと考え、「それなのにあなたは…同じように扱いました」と「主人に不満をもらした」（文句をつけた）のでした。

この、彼らとしては当然だと考えた「不満」、不平、文句に対して主人は答えました。

20:13 しかし、主人はその一人に答えた。『友よ、私はあなたに不当なことはしていません。あなたは私と、一デナリで同意したではありませんか。』

20:14 あなたの分を取って帰りなさい。私はこの最後の人にも、あなたと同じだけ与えたいのです。

20:15 自分のもので自分のしたいことをしてはいけませんか。それとも、私が気前がいいので、あなたはねたんでいるのですか。』

主人の言葉は「下がれ、サタン」のようなも厳しい口調ではありませんでした。

しかし、不満の声によって動揺している様子はみじんもなく、権威のある、堂々たる、毅然とした言葉でした。

「私はあなたに不当なことはしていません。」という主人の言葉は、「神に不正があるのでしょうか。決してそんなことはありません。」（ローマ 9:14）という使徒パウロの言葉をも思い起こさせます。

そして「私はこの最後の人にも、あなたと同じだけ与えたいのです。」「自分のもので自分のしたいことをしてはいけませんか。」との言葉は、同じく「わたしはあわれもうと思う者をあわれみ、いつくしもうと思う者をいつくしむ。」（ローマ 9:15）とパウロが引用したみことば、「わたしは恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」（出エジプト 33:19）を思い起こさせます。

「働いたのは、一時間だけ」だった「最後の人」たちにも「最初の者たち」と「同じだけ与えたい」というのは、「気前のいい」「主人」の全く自由なあわれみ、いつくしみ、恵みによることでした。

「最初の者たち」は、本当はそんなあわれみ深く恵み深い「主人」を喜び称えるべきでした。

そして「主人」が「自分のもので自分のしたいことをして」当然だ、と「主人」の主権を認めるべきでした。

「主人」が自分に「約束」した「一デナリ」（2）を「自分の分」として喜んで感謝して受け取って帰れば良かったのです。

「最初の者たち」が不満に思ったことは、「主人」が「最後に来たこの者たち」を自分たちと「同じように扱」ったことでした。

彼らからすれば、“自分たちと同じ賃金を受けるに全く値しない、資格がない者たち”に「主人」が自分たちと同じ賃金を払ったことが気に食わなかったのでした。

でもそれこそが、「主人」の恵み、いつくしみであり、良いことだったのです。

「**氣前がいい**」の直訳は「**良い**」であり、「**あなたはねたんでいるのですか**」の直訳は「**あなたの目が邪悪なのですか**」です（欄外注）。

「**主人**」の「**良い**」ことと「**最初の者**」の「（目が）**邪悪**」なことが実に対照的です。

「**最初の者**」は「**主人**」の「**良い**」ことを見てもそれを「**悪**」として見たのでした。

「**主人**」が「**良い**」ことをしたのに「**不当なこと**」をしたと見たのでした。

そもそも、五時ごろに、今から働いても精々一時間だとわかっている人たちを雇ったということ自体が「**主人**」の恵みの表れでした。

雇われた方も、一時間しか働いていない自分たちに一日分の報酬をもらえる資格があるとは考えていなかったでしょう。

しかし、本来はその資格のない者であるにもかかわらず、ただ「**主人**」の恵みのゆえに彼らも「**最初の人**」に約束されたのと同じ「**一デナリ**」を受け取ることとなりました。

こうして「**主人**」の恵み深い意思によって「**最後の人**」が「**最初の者**」と並ぶこととなりました。

こうして「**後の者が先になり**」ました。

それでも「**先の者が後に**」なったわけではありません。

「**最初の者たち**」が「**主人**」の主権を認め、「**主人**」のあわれみ深さ、恵み深さを喜び称えたならば、です。

しかし、「**最初の者たち**」は「**主人**」が全く資格の無い「**最後の人**」たちを自分たちと同列に置いたと見ました。て「**主人に不満をもらした**」のでした。

別の言い方では、「**主人**」が自分たちを全く資格のない「**最後の人**」たちと同じ位置に“引き下げた”と見たのです。

「**主人**」には全くそんな悪意はなかったにもかかわらず、彼らは「**主人**」をそういう彼らの勝手な悪意をもって見たのです。

自分たちは「**最後に来たこの者たち**」より良くやったという人間同士の比較と自画自賛によって勝手に「**もっと多くもらえるだろうと思った**」だけだったのに、「**主人**」がそうしてくれなかったと言ってふて腐れたのでした。

そうやって自分たちの努力は報われなかったという思いでいっぱいになり、約束どおりの一日分一デナリを頂いていながら、まるで一時間分の報酬しかもらえない「**後の者**」のように自分で自分をしてしまったのでした。

それは「**主人**」の善を悪と見なす“倒錯”した姿であり、自分に対するものであれ他人に対するものであれ「**主人**」の恵みを恵みとして認めることができない惨めな姿でした。

考えて見れば、朝一番に「**主人**」に見出され、「**一日一デナリの約束**」でぶどう園で働くように雇われたこと自体が「**主人**」の恵みによることでした。

それなのに、その恵みに感謝することなく、また他人一殊に自分より資格のない者一が「**主人**」から恵みを受けたのを見てそれをねたむということは何という“**悪**”でしょう。

こうして先に「**主人**」の恵みによって多く働きながらも、その恵みを恵みとして知るという点でも、「**先の者が後に**」なったのでした。

それは結局、神と神の恵みに目を向けて神の恵みは自分に十分であると感謝するのではなく、自分であれ他人であれ人間に目を向け、自分と他人を比べ、自分のわざを誇り、他人を見下すところから来ることです。

神のあわれみ・恵みが自分には少な過ぎ、他人—特に自分が見下している人—には多すぎると考える。

その一方で、神が捨てよとお命じになる事柄や負わせる十字架が自分には多過ぎ、他人には少な過ぎると考える。

神が要求する神のための働き、奉仕が自分には多過ぎ、他人には少なすぎると考える。

これらの考えは人間の考えであり、神の考えではありません。

しかしこれらは往々にして神のために長く、多く働き、労苦していればいる人ほど実は陥りがちな過ち、誘惑だと言えるのではないのでしょうか。

「ご覧ください。私たちはすべてを捨てて、あなたに従って来ました。それで、私たちは何をいただけるのでしょうか。」(19:27)と言ったペテロの言葉のうちにイエスはそんな危険を見て取り、警告なされたのでした。

それもまたイエスのあわれみであり恵みでした。

祈り

天の父なる神よ。今日も主イエスのみことばによって、私たちの心を照らし、探ってください感謝します。

私たち、また一人一人に対するあなたの絶対的主権と恵み深く善きみこころをすぐに疑い、悪く考えてしまうあわれな罪人である私たちをあわれみ、イエス・キリストのゆえにお赦してください。

私たちが、私たちに対するあなたの絶対的な主権を認め、あなたから「自分の分」として受けております限りなく十分な恵みによくよく目が開かれ、恵みをよくよく覚えて感謝し讃美する者としてください。

私たちに対するあなたの報いはすべて私たちの力や功績によるのではなく、恵みにより、イエス・キリストによるものですから、私たちが他人と比べて自分を「先の者」と誇ることなく、また他の人に対するあなたの恵みを妬むことなく、ただあなたの御前であなたの最善なる恵みに依り頼んであなたに忠実に歩み、イエス・キリストに付き従って行きますように生涯助け導いてください。

あなたの恵みそのものであられます主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン。